202111　口語詩句 11 月総評　　龍　秀美

　近年、詩の世界でもレトリカルなものと直感的で人間的なものとが棲み分けているように感じます。川柳やアフォリズムに見られる批判的かつユーモラスなものも。今月は少しそういうことも意識してみました。

おつきさまから
つまさきまで夜
作者　mi.　東京都
――純粋に楽しんでみたらこんなものができました。

片方の靴だけ売られている街の
見えないものにぼくはなりたい
作者　まちりこ　埼玉県
――あり得ない町の見られないぼく。究極の癒しかも知れない。

声変わりした君が呼ぶ
わたしの名
かすかにひかり出す

わたしの名
作者　さいう　愛知県
――直観で語られた青春の姿。

凍滝や犬ふがふがと臭い息
作者　中矢　温　東京都
――静的（スタティック）な自然の中に生き物の体温と体臭が鮮やかに対比する作品です。

すっぽんが
ぐんと右手を伸ばすとき

生物室の窓はあかるい
作者　さいう　愛知県 16 歳
――生き物のさりげない動きが印象的で未来の明るさまで感じさせます。人間臭い「右手」が効いています。すっぽんという強い生命力の素材を選んだ効果も。

お前が逝って

わたしは

くしゃみみたいに

涙が出るよ

作者　春町　美月　大阪府

――くしゃみ、しゃっくり、笑いなどと同様の生理的反応としての悲しみ。あまり語られたことのない悲しみのスタイル。

寂しさに慣れてきた頃
手に取ったペットボトルのへこみ
を戻す
作者　まちりこ　埼玉県
――これも何気ない触感の反応。人間はこんなことで癒されたりもする。

俺たちは手も足も出ず韻律に
逃げ込んできたヘタレだろうが
作者　松下　誠一　東京都
――ごもっとも、日本人の共通の嘆きか。

実は枕は違憲だった、と。
作者　ササキリ　ユウイチ　群馬県
――遠いところのものが意味不明に繋がっている現代の危うさと不安。

まだ満足に歩けない子が
ゆるやかな
カーブを曲がるようなかなしみ
作者　まちりこ　埼玉県
――どちらに振れるか、中心へ向かうのか外へ弾けるのか、やり場のないかなしみの見事な形象化です。

デジタル化
進む昨今迷惑か
と悩みつつも
彫られてく虎
作者　風船　東京都
――年賀状の芋版でしょうか。ま、芋版は済んだら焼き芋にできますし・・・。

鏡になったあなたを投げつけられ
作者　合川秋穂　京都府
――あなたは私で私はあなたですし、いったいどちらを投げつけられたのか。

秋天の高いところを
ひとくぐりさせた
あなたの絵画が並ぶ
作者　さいう　愛知県
――澄み渡った秋天。人間世界を超越したような絵画が目に浮かびます。